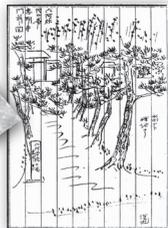
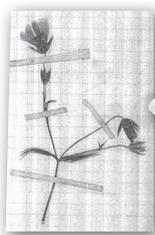


庭の荷風の庭



荷風の文芸空間に“理系感覚”という
一本の補助線を引いてみる

訪問者 坂崎 重盛

秋の日や川見る人の影伸びて

日本の散策文芸の傑作、すでに近代の古典とも目される、永井荷風『日和下駄』が収められている岩波文庫『荷風随筆集』（上）に、東京周辺の水の流れ、河川に関わる作品として「夏の町」「向嶋」「深川の散歩」「放水路」「葛飾土産」「水のながれ」「向島」といった好ましい小品が一括収録されていることは、すでに述べた。

東京の川筋、溝、運河をながめ、歩きめぐった荷風は、江東から荒川放水路、さらに旧中川へと歩を進めてゆく。そして、昭和二十年三月の東京大空襲によって麻布の「偏奇館」を焼失した散人は、八月十五日の敗戦のあと、江戸川を越えた千葉県市川市（葛飾の地）に生活の拠点を移す。

「葛飾土産」は、荷風が市川に移り住んで二年後に発表される（単行本は昭和二十五年、中央公論社刊）。

荷風散人の、葛飾暮らしをはじめたころの風姿を撮った写真が収められている戦後まもない元本『葛飾土産』は、ほくにとつて、なんとも嬉しい一冊だが、この稿は、今日、入手しやすい岩波文庫の『荷風随筆

集』（上）をテキストとする。

この「葛飾土産」の中の、散人ならではの植物話。まずは小学生のころの思い出からはじまる。

わたくしが小学生のころには草花といえはまず
桜草さくらぞうくらいに止って、殆どその他のものを知ら
なかつた。荒川堤あらかわづみの南岸浮間ヶ原うきまがはらには野生の桜
草が多くあつたのを聞きつたえて、草鞋わらじばきで採
集に出かけた。

この桜草の一文中の「浮間ヶ原」は、この荷風の文
で初めて知った地名。「荒川堤の南岸」とあるが（ど
のへんなんだろう）と気になったので調べることにし
た。手元の『角川地名大辞典13 東京都』（昭和五十三年
刊）にあたる。

ぼくは勝手に、すでに消えた地名か、と思い込んで
いたがとんでもない。北区に浮間一〜五丁目として現
存する。しかも荒川、岩淵に隣接している。岩淵とい
えば赤羽へ居酒屋散歩に向くとき、事務所のある飯
田橋からは南北線の赤羽岩淵駅で降りて、荒川と隅田
川が分岐する水景をしばし眺めやっただとJR赤羽駅

近くの飲食街に向かうことが多い。

この辞典には、浮間「近世」の項に、「浮間ヶ原の
サクラソウは人々に愛賞された」と記されている。こ
の地は、江戸時代からサクラソウの名所だったようだ。
荷風の記述に戻ろう。散人は小学生のころ「草鞋ば
きで」この浮間ヶ原に出かけたとあるが、サクラソウ
を観に行ったとか、摘草に行った、ではなく、「採集
に出かけた」というあたりが、理系的で牧野富太郎
（独学の植物学者）の少年時代などを思いおこさせてく
れて微笑ましい。

サクラソウにつづく一文。

ダリヤは天竺てんてく牡丹ぼたんといわれ稀に見るものとして珍
重された。それはコスモスの流行よりも年代はず
っと早かつたであろう。チュリツプ、ヒヤシンス、
ペコニヤなどもダリヤと同じく珍奇なる異草とし
て尊まれていたが、いつか普及せられてコスモス
の流行はやりのころには、西河岸の地藏尊、虎ノ門の金
毘羅びらなどの縁日えんじちにも、アセチリンの悪臭鼻を突く
燈火の下に陳列されるようになっていた。